慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新出聖徳太子伝二種 : 承前
Sub Title	
Author	牧野, 和夫(Makino, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1989
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.24 (1989.) ,p.421- 449
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000024-0421

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新出聖徳太子伝二種—承前—

牧野和夫

ここに本論集二十輯（昭和五十九・三刊）にひき続き、紹介する聖徳太子伝記二種は、後半のみ存する零本並びに有欠の端本であるが、中世の聖徳太子信仰の隆盛に伴う厖大な量の太子伝記・注釈書の出現を示す有力な資料である。

両書の書誌的事項を記すならば、

一、久遠寺身延文庫蔵

〔太子伝〕附上宮皇太子菩薩伝　〔室町〕写　大一冊

楮紙後補表紙（二七・八×十九・八糎）、中央鉛筆にて「雑一ノ内／太子伝ノ内古写」と。右下隅に「日遅」と墨署名あり。前欠と覚しく本文初行は唐突に「□□□（虫喰）宣時也又云清且（虫）ト也或説ニハ平且亦云午時ニ仍両説也但／□（虫）時正義歟…」と始まる。無辺無界、字面高さ約二六・〇糎、八行々二十五字内外、楮紙（二七・八×一六・一糎）両面書、本文料紙の天地並びに左端に補強の紙（幅三・五糎）を継ぎ、所々補写・なぞり書など多し。十丁裏迄は〔室町〕書写のもの、十一丁表よりは料紙を異にし（補強の紙を継ぐ頃のものか）ており、〔室町・近世初〕頃の書写である。十丁裏までは、本文同筆墨にて、清濁声点、レ点（中央）、一点、訓み仮名・送り仮名等を附す。八丁表、本文四行分あり、次行に「本云康永二年（癸未）二月廿四日　伝受沙門雄慶（??）」と記す。次行以下三行分に蓮牌型墨印（六・七×一・九糎）「身延文庫」と。次いで、「上宮皇太子菩薩伝（隔四格）天台沙門釈思宅撰／唐是末州相色。県姓ハ范大池村ノ人三生之間

碑文現在之一昔陳朝ニ有／…」と始まり、十丁裏八行目を以て了る。次丁から補紙後筆墨書あり、十一丁裏にも前出の「身延文庫」印あり、十二丁表より「本国詠歌始日本記云」と小題して十二丁裏まで室町末近世初頃の後筆墨書。

〔太子伝〕の内容は、その末に、

「太子伝記秘抄授弟子語云　南無三国伝燈

大導師上宮太子承授

灌頂仏子某敬持三返

種々供物ホ可在之一云々　面授口決能々守機伝之一　血脈ホ別在之」

とある如く、「太子灌頂伝」と関わる貴重な一書であり、本集二十輯に紹介した久遠寺身延文庫蔵『聖徳法王三国伝燈灌頂伝』〔室町〕写大一冊の後欠の部分に該当しうる内容である（書風・原装訂など両書には相近いものがある。ツレかどうかは、後考を期す）。同じく二十輯に収めた野中寺蔵『上宮太子御遺記注』が、「〔四天王寺〕絵所上座」と係わり、「伝絵」（絵解き）に密接な「秘事」を伝える点と併せて、寺院と太子伝相承の「しくみ（システム）」を商量するに資するところ多大な資料である（家蔵〔近世〕写『上宮太子御遺言記』大一冊は、追記に「初重」から「五重」に及ぶ「五重相承」の内容が記されて詳細である。しかし、正徳三年における法隆寺での伝授の旨存し、中世に遡りえない点を憾みとする。早稲田大学図書館蔵教林文庫本と共に紹介予定）。おそらくは、光久寺並びに聞名寺蔵『正法輪蔵』の秘事」「大秘事」などにも同様の相承型態に基く血脈授受が予想される（但し、いわゆる文保本と係わること深い「土庫ノ能登房」の太子伝が「今伝ノ灌頂トメ本枕ヲタカクトリテ人ニ相伝」、「手継証文ヲ紛」ことなかった点は、考慮せねばならないであろう）。「灌頂」という寺院における「システム」の刻印された「灌頂伝」の「現われ」のひとつとして、当該〔太子伝〕は大いに尊重されるべきであり、本奥書に認められる「康永二年（一三四三）」伝受の記は、こうした「灌頂」の「しくみ」と内容が鎌倉期に遡りうることを証するものである。既に金沢文庫蔵『上宮菩薩秘伝』や同文庫蔵古文書類からの検討が林幹弥氏の手によってなされているが、近く阿部泰郎氏に「中世聖徳太子伝『正法輪蔵』の構造」もある。家蔵『法隆寺舎利相伝』一軸によれば、「惣持――覚禅」等を経た血脈相承の特異な内容を伝えており、「太子灌頂伝」に絡む「秀範」の口伝も見える（室生での伝授を伝え、称名寺釈阿(?)の名も見える。律僧忍空を

めぐる「如意宝珠」と「南無仏」の「舎利」、室生山をめぐる『御遺告』と宝珠――注釈・秘事・口伝――、これらが今後の課題である)。太子伝の「灌頂秘伝」の奇怪な内容と想外な広がりに驚かされるのである(『法隆寺舎利相承』は別に影印紹介予定)。その注釈の質・内容について一言つけ加える。この『「太子伝」』に伺われるように、秘事・口伝相承という「可レ秘」灌頂「伝」の内容は、概ね、朗詠集の注釈や百詠の注などに拠る「幼学」的世界であり、古今和歌集注釈類の切りとり・弥縫である。「幼学」的世界を「幼」という概念に強くひきつける余り、従来の研究は、寺院僧坊の「文物」集散の「しくみ」を看過し来ったのであり、逸するもの又甚だ大であったのである。

なお、『上宮皇太子菩薩伝』については、飯田瑞穂氏の諸論考に譲る。御参照願いたい。

一、慶応義塾図書館蔵

上宮救世大聖御伝存巻下　〔室町後期〕写　大一冊

墨色後補表紙(二七・〇×一八・二糎)、見返し後補。内題並びに本文初行「上宮救世大聖御伝下/十九才　十一月七日太子深□御出家/御志有御門崇/峻天皇ニ此由ヲ…」。無辺無界、字面高さ約二三・八糎、毎半葉八行々二十二字内外字数不等、漢字交り片仮名。本文は二十四丁表を以て了り、丁を改めて「舎利礼/一心頂礼……以下五行にわたる式文あり。本文同筆の墨書である。終丁裏左下に「月明荘」の小朱印がある。

『大聖御伝』の内容は、二丁表に「廿歳廿一歳　廿二歳」とし、三丁表に「廿三歳　廿四歳　廿五歳」として各々廿二歳・廿五歳の内容のみを記す如く、太子伝からの抜書であり、しかも梗概風の省筆ぶりは甚しく、誠に片々たるものである。下着が十九才から四十九才並びに滅後を二十四丁に収めることから判断し、上巻は誕生以前から十八才までをほゞ同様にして録するものか。太子毎歳に豊かな記事を設ける太子伝記に比して簡略この上ないものであるが、廿七歳芹摘后や黒駒のこと、三十五歳の達磨の化身の蛙の唄師代替のこと、三十六歳の小野妹子衡山に渡ること、四十歳の乞食との歌問答のことなどは、詳細を記して憚るところがない。珍しい内容や興味深い内容のもの(その判断の基準は明確にし難い。秘事などとの関係にも注意を要する)のみを筆録した、一種の「抜書」である。他に、室町期の抜書としては彰考館蔵『太子伝抜書』を知るが、「太子伝」流布の一型態としての「抜書」が、今後、更に報告されることを期待するものである。

*

本稿の成るに際して、閲覧・翻字を御快諾下さいました久遠寺身延文庫・慶応義塾図書館各位に対し厚く御礼申し上げます。

凡例

一、ここに翻字するものは、次の二本である。

『〔太子伝〕附上宮皇太子菩薩伝』〔室町〕写　大一冊　久遠寺身延文庫蔵

『上宮救世大聖御伝』存巻下〔室町〕写　大一冊　慶応義塾図書館蔵

一、翻字に当り、次のような方針に従った。

1、漢字はなるべく正字体を使用するが、適宜、別字体、略字体をも併用する。清濁声点は除くこともある。

2、虫損等による判読不明箇所は、□で示す。

3、各丁の終りは」一・ォ・」一・ゥの如くに示す。

又、改行は、本文の行どりに従うが、制約上、本文一行は翻字文二行にわたる場合が多い。

4、『〔太子伝〕』には、貼紙補写の部分あり、*1・*2として後に一括して注記する。

身延文庫蔵　〔室町〕　写『太子伝』　大一冊

□□□宣〔寅〕時也又云清。旦ト也　或説ニハ平旦亦云午時仍両説也但

□時正義歟　合掌向東ト云ハ東方ハ方始也是表法興始ト

□□〔心カ〕也法花ノ時可開初住无生ノ悟故迹門ニ東方光照思之又表

□心寂初ナル事ヲ也是則太子受生於和国ニ施化於濁世事為令衆生

□□者心セ次勧行業為令証芥涅槃ノ義故也

一義云太子生

和国事西方本師ノ名号ヲ東土日本ノ衆生ニ勧唱ヘシメテ令往生極楽ニ

給ソ為本懐故ニ向東方弥陀ノ名号ヲ弘給也太子御一代ノ大綱ヘ念仏□シ

*1 為素懐也故ニ唱一称南無仏再拝シ玉ヘルハ弥陀ノ名号也

此事後鳥羽院、御宇」一・オ

*2 法然上人。開成皇子、草創摂州勝尾寺参詣。帰京之後

*3 同院被書写供養一切経-被送彼寺-へ是ノ供養導師、安居院聖

*4 覚法印也供養言云　。聖徳太子唱南无仏-慥雖不顕其名-ヲ

*5 心弥陀、名号也云々先賢詞定有其致-歟尤。足為支証-ト云々

*6 一義云仏法興隆、寂初故先帰三宝、惣躰ヲ顕玉歟仏ト者三世十方、本仏迹仏

*7 等通号云々　若重々南無三宝ト可唱給-何限南無仏-耶

答

*8 仍仏昔ニ帰三宝、惣躰ヲ具足スル也其故、仏ト云ハ能証之覚躰法ト云ハ所□

□□僧云利他、応用也依之帰仏、覚躰ニ内証外用、功徳悉具足也」一・ウ

□□無仏ト云ヘル帰三宝也其例証多之

□南無仏者尺迦、名号也尺尊一代、教法ヲ和国ニ為弘通之-故一代教主、名号ヲ先唱給也仏舎利ヲ御手ニ開玉ヘル尤有所以歟松子伝其証也

一、義尺迦弥陀、名号也今平氏伝ニハ称南無仏-ト再拝スト云ヘリ余伝、意ヘ称南無仏々々々再拝スト書リルニ案其意-ヲ太子仏法興隆、寂初ニ先一代教主、名号ヲ唱テ帰命シ次ニ本師弥陁、名号ヲ唱テ帰命ノ再拝スト云ハ各一礼ヲ成給歟云々尺迦如慈父-。弥陀如悲母-。如此義者尺迦ト云証弥陀ト云証共無相違也

一義云薬師、名号也元興寺本紀舎利伝云拳テ手ニ於舎利-即唱薬師、宝号-文」二・オ

伝教大師造作礼拝文云南無ヒルサナ亦名尺迦牟尼像法転時救衆生故

薬師玉(ルリ)玉光仏文凡此等義ハ衆生随類各得解、道理ナレハ大聖、善巧何(レモ)各

相叶聖意ニ不可有相違ニ歟　再拝礼ニスルニハ三宝ニヲ致
三礼ニ三身ノ功徳ヲ恭
敬スル義也神明ヲ拝スルニハ致再拝ニ本地垂迹ノ躰ヲ恭敬スル
義也貴人ヲ
敬ニハ用一礼ニ当時ノ威徳ヲ敬ト故云事常途義也今再拝ノ心
如何
一義外儀ハ順神国ノ風儀ニ内ニハ帰三宝ノ惣表歟　一義云
唱尺迦弥陀
□□□〔各〕用一礼ニ歟但帰仏ニ用一礼ニ事一礼ニ帰三宝ノ意ヲ摂
歟
□□寺ニハ南無仏ト三度唱テ礼拝云々」ニ・ウ
□利事或説云御手ノ中ヨリ出一粒仏舎利ニ障子伝云右ノ御
手出仏舎利
□□開右拳ニ合掌ノ称南無仏ニ出仏舎利ニ或説云其ノ御手
ヨリ出三粒舎利
或□開左手ニ合掌即出三粒仏舎利ニ光明赫奕タリ但右拳ヲ
開テ出〔仏〕□

舎利一粒ニ相伝義也　右ヲニキリノ手ト云事俗言可思之ニ
百済寺縁
起云太子曰我レ悲母ノ胎内ニメ拳リ尺尊ノ舎利ニ生我国ニ以
降自建四十六箇之
伽藍ニ崇仏経ニ度僧尼ニヲ文或説云此仏舎利ハ昔シ勝万夫人
タリシ時御父
波斯匿王ヨリ譲得給ヘル御舎利也天竺ニメ卅余歳恭敬供養
之後任ニ願力ニ
百済国ニ来生ノ時モ此御舎利ヲ御身不離ニ下ハ今日本マテモ。
云々　此御舎利ハ尺尊」三・オ
右ノ眼精ノ御舎利也左眼精ノ御舎利ハ留天竺ニ右眼精ノ御
舎利留日本ニ
故ニ天竺ヲハ名月氏ニ和国ヲハ名日域ニ日月ノ二徳ヲ天竺和
国ニツカサトル事甚
深ノ子細。在之ノ密ノ秘。相伝甚深々々是ノ眼精ノ御舎利ハ高
姓ハラ門三石ノ御舎
利ヲ天一石人一石竜一石分シ時舛ノ尻ニ三粒ヲ付テ我分トセシ今南

無仏ノ御

舎利是也法隆寺奉安置之ニ〃揉扶桑記六局伝日次伝ノ説也

或説ニハ

天王寺在之或説云天王寺ノ御舎利ハ元十三粒御坐ケルカ十

一ハ合ノ成一ニ仍三粒在之ニ也

□〔或〕説ニハ天王寺御建立之時金剛カ参ノ開右手ニ奉シ御舎利

。物語在之ニ今天王寺御舎利ハ是也

□也後此態永止文七歳二月ヨリ焼香献花正経論ヲ御披見

アリテ先天下」三・ウ

□月六斉日ノ欽生禁断事ヲ御奏聞　依之ニ勅許是我朝ノ衆

生捨悪持善ノ

源也故ニ合掌ノ御クセハ仏法弘通ノ御祈念也七歳ヨリ正ク

仏法利生シ給故此態永止トハ云也

法興元世事　欽明十三年ノ仏像等ハ不崇敬之ニ剰難波ノ堀

江ニ抛捨故非法

興ニ歟仍四月能言能語ト云ハ法興ノ相貞也　但シ延暦寺ノ僧

禅岑（キシカ）。記云

欽明天皇以前第廿七代継躰天皇即位十六年壬〔寅〕宣春正月

漢人安部村

主司馬達即結ニ草堂ヲ於大和国高市郡坂田原ニ安置本尊ニ

。依礼帰。拝ス

挙（コソテ）世而皆云大唐神ニト雖然ニ遂ニ広不流布ニ矣如此ニ記者

継躰天皇ノ御

宇法興元世ト聞タリ。或説云如来滅後一百余年ニ中天竺

広竭陁国」四・オ

倶蘓摩城有育王ニ収仏舎利ニ役使ス鬼神ニヲ起八万四千宝

塔ニ遍満閻

浮提内ニ故和漢普ク有ニ此宝塔ニ而震旦ニハ奏始皇焼詩書

百家之典籍

埋儒士四百六十人ニ之時彼ノ育王ノ塔当此時ニ隠没スト云ヘ

リ同帝ノ時外

国ノ沙門釈利防等ノ十八人ノ賢者将来仏経ニヲ献ル始皇ニ々

々不信受之ニ剰

彼ノ利防等ヲ禁獄スルニ夜有テ金剛丈六ノ人ニ来テ破レ獄出之ニ

始皇驚怖ノ稽首

礼謝スル雖尓遂以不及興行ト文此等ノ意設雖不及興行ト是

非法興世ニ乎

□[*10]ノ旧記。尓トモ何レモ教機ト不相応ニ時ハ王臣共ニ不信

受ニ無流布ニ之上ハ今

□興ノ道理ニ王臣共信受シ世人同ク修行スル是ヲ法興ノ元世ト

ハ云也故ニ漢朝ニハ明帝」四・ウ

□[*11]敏達此御代ヲ法興元世トハ可云ニ也一和漢両朝ノ仏法

弘通偏依合利ノ威験□

昔周[*12]ノ成王ノ時三月三日ニ周公旦桃花ヲ賞翫シ曲水ノ宴ヲ被

始行ニ事云々

周文王—武王—成王（周公旦）或説云漢朝ニ閔山ト云山ノ頂ニスコ

シクホキ所ヨリ水流□（出）タリ

此水岩カトニサヘラレテ形成ノハノヲ巴字ニ次第ニ流レ下ル

興増所也依之ニ君臣

於彼所ニ桃花并ニ鸚鵡ノ坏ヲ水ニウカメテ作レ詩増レ興酒

宴アリ故曲水マカレルミツノ

宴ト名ク桃花仙薬ヲ用ル故桃花ノ宴トモ云伝タリ

或説云周文王ノ御子周公旦ハ賢才無双ノ人也巴ハ川ノ没山

ト云所ヨリ水流レ出テ、

三迴メクリノクタル水ノ形如巴ハノ字此曲水ノ邊ニメ公旦被レ始レ宴ヲ

故云曲水宴□云々」五・オ

或説云巴ハ州ト云国ニ山アリ巴山ト云山ノ峡カヒニ水流タリ三メク

リメクタル巴ト云

文字ニ似タリ周ノ成王ノ伯父周公旦世ノ政ヲ納メ給シニ故三月

三日上巳ノミノ日ニ当テ

洛陽ノ宮居ニハカウノ巴ハ峡水ヲウツシテ山水ノツクリ岸ニ桃ヲウ

ヘテ盃ヲ鸚鵡ト云

鳥ノ形ニ作テ此水ニウカメテ詩ヲツクリテ坏ノ流下ルニ我カ

前ヲトホル時詩ヲ作出シタル

者ニ坏ヲ取テ酒ヲノム飲不作得ニ者ハ空ク不得取レ坏ヲ云々楽天詩云

水成巴ノ字ニ初

三日。源起テ周年ニヨリ後幾ノ霜ソ

或礙ハテ石ニ遅ク来レハ心潜カニ待ツ牽レテ流ニ遄過レハ手先遮ル

此詩ノ意ハ坏流下ル有
様石ニサワリテハ遅来ル故詩ヲ作マウケタル人ハ早我前ヘ
来カシト心ヒソカニ待也坏」五・ウ
流ノハヤキニ引カレテ早スクル時詩未ニ作ー出ー人ハ手先
サヘキル也
或説云秦ノ昭王以三月ノ上巳ノ日ヲ置テ酒ヲ於河曲ニ有テ金
人飲之ー矣後世皆用三月三
曰ー詩云春来テハ遍ク是レ桃花水ナレハ　桃花ノ水ト者晋ノ世ニ
武陵ト云人三月
三日行遊山河ー桃花浮水ー流下其色艶々トメ河流皆ナ紅ノ
色ナリ武陵見テ之ー謂ヘリ
寄麗ート従河ノ岸ー尋行桃花多ク開タル是アリ是仙家也遂ニ
臨テ宮檻ニ杖ニメノ斧ーヲ
立止テ二仙ノ囲碁ヲウツヲミル其間食時斗ト思ヘリ或説半日欲出
里ーニ斧即
朽テ仙人垂レテ哀ー教テ出之ー親子共ニ無遇七世孫云々仙源
桃源桃家

桃花宴曲水宴事　本朝ニハ人皇第廿二代雄略天皇元
年三月上巳カミノミ□」六・オ
幸後園ー而為曲水之宴ー群臣称万歳ー矣　同廿四代顕宗天
皇ノ御宇
被行之ー其後敏達天皇御宇被行之ー云々　和漢中絶多之ー
六十代ノ帝延喜聖代ニ被行之ー時菅丞相被書序ー其御詩ヒ詞
云
春之暮月々之三朝天酔于花桃李盛也我君一日之澤万機
之余
曲水雖叵ー遺書雖絶ー書巴字而知地勢思魏文以翫風流蓋
志之所
謹上小序文　凡桃花宴ハ延ヘ年齢ヲ払フ不祥ヲ公私ノ祈也
云々
吾児ワカコ何イカニヲモフ謂文事　児ト云ハ太子ノ御事也太子幼稚ノ時ノ御
名ハ阿児ナリ是
阿児トヨム人モ在之ー　阿児アコトヨム人モ在之ー　阿児名義
甚深云々」六・ウ

桃花ハ一旦ノ之栄物。是色アル者ハ皆生死流転ノ因縁ナル故ニ未来カ、ミテ色ヲ

イマシメ給也　松葉ハ百年之貞木也ト云者トキハ木ナル故ニ仏界ノ常住ナルヲ

賞給義也桃花ハ延齢ノ功能有リト云ヘトモ有為ノ法也皆終ツイニハ無常ニ帰ス□

仙家モ生死ノ内也不可遁死ニ松葉ノミトリノ色カワラサル事ハ仏界常住ノ

覚躰所表ナルヘシ楽天云十八公栄霜後露一千年色雪中深文

昔丁周ト云者夢ニ腹ノ上ニ松生タリトミル自ラ合セテ云ク

松ト云文字ハ十八公トカケリ

我今十八年アリテ三公ノ位ニイタルヘキ夢也ト云々三公者大臣位也

如案ニ経十八年ニ登三公ノ位ニ

松名大夫ト事奏始皇狩泰山之時ニワカニ村雨アリ松下ニ入テ雨ノ難ヲ去□」七・オ

感其徳ニ被授ニ五品ノ位ニ被号五大夫ニト了　或説ニハ松五本ノ下也仍号五

大夫ニト実ニハ各大夫ノ位也　五品トハ五位也

万歳楽太子冊一歳壬申自呉国来味摩師ト云楽人日域伝妓楽之舞吾朝之楽始也

无常太子冊七歳戊刀正月自近江守献人魚瑞物太子無常遷化ヒ變ヒ由奏

天皇同年夏五月書写大般若経

或伝云妃者辛巳一定也二月廿一日癸酉歳入滅御年卅六同廿二日戊申夜半太子入滅或説云一定辛巳歳

冬十二月廿二日ヒ太子御入滅云々　日継伝辛巳歳太子后一度二月一夜半

御入滅ハ実也太子五十蘇我大臣者御入滅七年戊子歳六月朔日卒

或丙戌五月死」七・ウ

太子伝記秘抄授第子語云　南無三国伝灯大導師上宮太子承授

灌頂仏子某敬持三返

種々供物等可在之ニ云々　面授口決能々守機伝之ニ血脉

等別在之

本云康永二年関未三月廿四日　伝受沙門雄慶』

「身延文庫（蓮牌型墨印）」

上宮皇太子菩薩伝　天台沙門釈思宅撰

唐是末州相邑。県姓、范大池村、人三生之間碑文現在之

昔陳朝ニ有」八・オ

南岳恵思禅師者亦説大隋、思禅師ニ思盖一人也謂陳隋二

国□

□也其南岳即陳之土境也隋、高祖令第二子漢王ニヲ領、四

十万衆ニヲ

平陳ニ入隋ニ即説隋、南岳山思禅師ニト其、南岳、霊応甚

多、百嶺相□〔隈〕カ

千巌。盤。欝タリ槙松仙柱亘嶺ニヲ侵霊ニヲ其嶺崇迥人莫窺

尋ニコト

□〔五〕通、僊ノセム府十仙窟。宅。儒。生輻。湊シ玄。侶如雲ニ集テ常ニ

有五千僧ニ修道

□〔多〕並ニ頭陁苦行シ坐禅誦経シ或ハ口宣三蔵ニ心味ハフ四

禅ニ振錫ニ納ニ衣シ携□

抛鉢ニ或ハ冬夏祖膊ニノ跣ハタシニノ足経行ス或ハ隠居テ巌穴ニニ喰

松ニ噉栢ニヲ或常

坐不臥ニ宴黙ノ夷真ナリ各檀ホシキマニノヲ已能俱求会コトヲ理ニニ其

山、間有二十里松径」ハ・ウ

有一、異人ニ守護此山ニ若悪人入山ニ懐ヲモフ劫奪ニセム者至レハ

松、径ニ異人即出□投手

牽入松林谿中ニ口言ク汝過去無量劫、中ニ作悪業ニ今旦

坐禅入滅尽定以

□手ニヲ投石ニ膝ヲソフアシノ脚上ニニ更不起ニヲキタトヒ仮令凡二十余人挙彼

一手ニ之石不能得動

次形〔以カ〕貞与凡ニ無別亦栖泊スム処ニ若有悪人ニ即現ス无ハ悪人ニ不

現ニ時共目ノ為大

梓渇ニ其山中ニ有千年梨樹ニ若発花ニ結果ニ即有レハ聖人応

生ニ於一時梨

樹生花ニ結果ニ其思禅師来彼山修道ニ即自竪一石ニ記之ニ

余一生来此一
迄(イタル)耆年一墜(ヲトシ)齢捨寿一遷形一後其樹又発花一テ結実一又竪一
石一記自云余(ワレ)
第三生於此間一修道在後一即云余今往テ東方ノ无仏法処一ニ
化人度物」一九・オ
至今唐朝一時人皆云往南岳一ニ観思禅師三生石一ヲ其樹唐ノ
開元年中
発花一結菓一至天宝八年一ニ有住檜和上一久在彼山一修道一
其年造大
講堂忽催造早即都ノ人會山中一僧等設大斉一於慶堂一其住
桧
和上至堂一礼仏一早合掌ノ東西着(ミソナハスコト)衆僧一ヲ早テ即帰房一斉
了用楊枝一
□(竟カ)廻頭一向崑崙一ニ近云我婆臈去テ哭崑崙一ニ嗄死テ作婆
臈一即報ノ
告堂中諸僧一ニ用楊枝一早便住堂中一ニ諸挙悲哀ス従此一衆
僧始テ□

住桧和上応ニヌト千梨一ニ也思大和上ハ即在テ霊山一聴シ法花
経一ヲ僧也然ニ霊山ニノ
聞聴(同カ)法花一有思禅師一在南岳山一智者ハ在ニ荊州ノ玉泉寺一
ニ定光禅師」九・ウ
在天台花的峯一然此三人各異ナリ於時一思禅師威綾(ママ)最甚シ
定光禅師□
耳零(タレリ)天蓋一智者ハ目ニ有重瞳一思禅師後生ニハ日本国橘豊
日ノ天皇宮ニ
生テ度人一出家一人皆不従一即云奴等不能捨離眷属一太子
云ク汝出家セハ
与汝高位大禄一不制姓房一自是已来出家スル衆甚多シ漸ク
後制以三帰
五八戒等一ヲ是ニ知ス(菩薩)ノ井方便善巧多方一経云先以欲釣(ママ)一
牽後令入(ヒ)人仏道一□(云々)
次発使一往南岳一ニ取テ先世持誦ノ法花経一七巻一部一巻
成小書沈香函□ニ
盛□至即作疏四巻一釈経一又作維摩経疏三巻勝鬘経疏一

巻於是

亦窮智鏡文飾レリ鳥章心聲玄律研幾秘術発揮シ名

教曠千古」一〇・オ

未開照晋礼客瞻百王而有袷遂得宝偈西従爰開

石室之闕

金牒東流逸竜宮之海蔵又講件疏香風四至起花雨ルニ

依霏

□纔歆流輝泛爾於是法花経創伝日本ニ菩薩兼入禅

定或時一日三日五日干時世人不識禅定但言太子入コト

夢堂ニ制ルニ以白

□進食ヲ先造大宮大寺為弓削大連起乱於摂津国ニ

造四天寺

□人出家而弓削殞大祢克宰又造法隆寺及皇后宮ヲ

又造□

□□妙安寺及般若寺ヲ造僧寺三ヲ造尼寺五合ノ八所ナリ

又記ノ言

□近テ□□歳ニ当有伝持戒律大興律儀厳峻ナラン是

知ヌ□」十・ウ

太子竜楼ニ不御鵲駕長ク飛乗劣仙ヲ面

仙ト赴　而昇ニラン妙覚矣

「身延文庫」（蓮牌型墨印）」一一・オ

」十一・ウ

本国詠歌始日本記云

第一歌云　天津姫美度乃謨唄勢志今耶菩根神乃始奈流

覧

第二歌云　天津姫御嫁勢志今日耶荒振神始覧

第三歌云　烏羽玉乃吾黒髪毛不乱結定世夜波乃手

枕

此歌者気長足珎司尊　安田玉由利姫夫妻安田玉由利姫

尊乃

余御貞目出無類御生於弟生馬武見尊御婦奉

歌是也

第四歌云　素佐乃尾尊於出雲国御配所詠歌云

雲八重垣妻籠天八重作薗乃八重垣云々

太子初科照耶片岡山歌読返秘伝云

尸那於伊伝片岡山仁照夜人我仁会瀬婆絶留日母無

私記云出尸那聖雲山　片岡山佐曽良悲天等化乃夜照

我」二・オ

日絶事無也云々　一達磨返歌詠返云　岩乃岡我耶度我身

乃

絶波古曽加流教者乃御名婆和須連目　此又岩岡者常在

霊山乃心

伽耶　我身乃絶者古曽　加流大君御名忘目者伽耶天竺

ノ伽耶城也彼所

世界衆生　方便契諾乃義加流大君者観音ノ三十三身

各別利生名字

何事加輪須連無土云々」一二・ウ

注

＊1　この一行分は、後筆にて貼紙補写。

＊2「法然」二字、貼紙補写。　＊3「同院」、　＊4「覚」、

＊5「心弥」、　＊6「一義云」、　＊7「等通」、　＊8「仍仏」、いずれも貼紙補写。　＊9「源」二字分の貼紙、下に「持行」と墨書か。　＊10・＊11の二字分は貼紙あるのみ。

＊12「昔周」は貼紙墨書。

慶応義塾図書館蔵〔室町後期〕写『上宮救世大聖御伝』存巻下　大一冊

上宮救世大聖御伝下

十九才十一月七日太子深御出家ノ御志有御門崇

峻天皇ニ此由ヲ奏聞有ヘキヨシ思召サレシ間百済ヨリ

向カヘ給シ先生ノ御衣鉢道具等ヲサヽケ皇居倉橋

ノ宮ヘ御参内アリ御舎弟丸子親王ヲ以テ事ノ由ヲ

御奏聞有キ天皇ユルシ給ハス蘇我ノ大臣キサメ奉テ

申様御出家ノ事努〳〵□〔不〕可有侍リ先帝ノ御遺勅

ヲ承テ苟モ□太子ヲ守護シ奉　寸陰モヲコタ」一・オ

ラス然ニ先帝勅メ曰ク太子ハ定テ御出家ノ志〔ママ〕御セハ

朕崩メ後ハ必ス御遁世ノ事ヲ思召給ヘシ相講〔アイカマヘテ〕汝補

翼トメキサメ奉テ努ク其儀アルヘカラスト念比ニ御遺
勅有リ耳ノ底ニ止テ未スレ忘侍リトテキサメ給シカレハ今
月十五日吉日良辰ナリヤカテ御元服有ヘシト定ラレシ
カハ
太子本意ナラス思召ケレトモ御勅定ナレハ十月十五日
御
元服アリ役ハ御舎兄丸子親王也左右ノ紙燭ノ役ハ
小野大臣馬子大臣也其比親王御涙ヲナカサセ給ケレハ
太」一・ウ
子ノ御衣ニカヽリケリ太子是ヲアヤシミテトヒ給フ答
テ
曰ク先帝ハ御歳十六ニテ御元服有ヘシト定メ御キ今マ
テ
ヲソキ事ヲウラミ又ハ先帝御座アラハイカニ悦ヒ思召
レント
アワレナリケレハカク御涙ニムセヒ侍リト曰ヘハ太子
モ涙ニカ
キクレ給テケレハ月卿雲客皆袂ヲシホリ侍ケリ
廿歳　廿一歳　廿二歳
推古天皇御即位大和国小治田宮ニ皇居アリ時ニ
天皇太子ニ曰ク我ハ女躰ナレハ太子□ヨリ政道ヲ」二・オ
助ケ給ヘト念比ニ仰アリケレハ関白摂政ヲ兼給テ
天下ヲソヲサメ給太子天皇ニ奏メ曰ク国主タルハ慈悲
深重ニメ民ヲアワレムヲ賢王聖主ト名ク国安カラス
臣ミタルヽ時ハ王ヲサメカタシ然ハ民ノ御ツキ物ヲト
ヽメ国
ノ済物ヲユルシ給ハヽ民安カルヘシト曰ヒケレハ三ケ
年ノ間
国々ノ済物ヲユルシ給フ然レハ万民千秋ノ哥ヲソウタ
ヒ
ケル其哥ニ曰ク君ハ万歳マシマサン我等モ御カケニサ
フラ
ハンツルト亀トハタハフレテ幸イ心ニマカセタリト仍
テ王法」二・ウ

サカンニメ国土豊饒也

廿三歳　廿四歳　廿五歳

太子先生ノ御檀那百済国王我ハ国王ナレハタヤスク

カナヒ難シトテ阿佐太子ト申ヲ御使トメ渡シ侍リキ竜(レウ)

頭鷁首(トウケキシュ)ノ船ニノリテソ来ケル太子御対面(タイメン)アリケルニ阿

佐

太子四言九句ノ偈ヲ唱テ讃歎シ奉レリ合掌敬礼

救世大悲　観音菩薩　妙教流通　東方日国　四十九歳

伝燈演説　大慈大悲　敬礼菩薩　此偈ヲ□テ太子ヲ」

三・オ

三度礼シ奉シニ太子ミケンヨリ光明ヲハナテ阿佐太子

ノ

カウヘヲ照シ給フ其ノ光宮中及ヒ世界ヲ照ス人寄異(キキ)ノ

思ヲ

ソナシ奉ケリ

廿七歳　太子ノ襄祖(ノウソ)ノ大和国三輪明神ヘ御参アリ大臣

公卿供奉セラル三輪山ノフモトニ川アリ三輪川ト名ク

橋ノ

上ヲ御幸ナラセ給ニ橋ノ下ニ賤キ女人芹ヲツミ面ヲア

ケス

打歎(ウチナケキ)テソイタリケル太子是ヲ御覧メ御供ヲ以テ是ヲ

問給フ女左右ナク申ムネナシ又重テ彼女ヲ召テ子」三・ウ

細ヲ尋ネ。給フ其時女申ケル我ハ此山ノフモトカシハ

テノ里ト云

所ニ貪賤(ヒンセン)ノムスメ也我父母ヲ養(ヤシナ)ハンカ為ニ里ニマワリ

袖ヲヒラクト云ヘトモ一人モ給ス事ナシ此ユヘニ此川

ニ出テ

若菜ヲツンテ我父母ヲ養ト云ヘリ太子孝養ノ心ヲ

切ニ思召(オホシメシ)テ太子曰ク我レ思子細アレハ我ト汝ト契ヲム

スヒ

侍ラント仰ラレシニ彼ノ女左右ナク承諾(ショウタク)シ奉ラス太子

重テ

曰ク我与汝ト宿縁アリ仰ニシタカウヘシト曰ヘハ猶承(ウケ)

奉(タテマツラ)ス

其時太子ヲホシメシケル様ハ我国ハ神国ナレハ三十一字ノ」四・オ

コトノハニハタケキ物ノフモヤワラクタメシナレハトテ一首ノ

詠哥ヲソ下給

三輪川ノ清ナカレノス、シサニハヤクモヤトルソラノ月カナ

トアリケレハ御返事ニ

三輪川ノ清キナカレニスム月ノカケト、モニソ西ヘ入ラン

カ様ニ申ケレハ太子曰ク汝カ所ヘ御幸ナルヘシ我御座ニハ六ミヤクノ

豹ノ皮ヲシキヤモチノ桜ラニ手白ノキノ子ヲスヘシト仰アリテ

明神ヘ御参アリケリ其後カシハ手ノ里ヘ御幸ナラセ給」四・ウ

ケルニ誠ニ賤シキ藤ノ衣ヲ着シワラヲムスンテヲヒトセリ

太子此カタチヲ御覧メ御装束ノカサネノ絹ヲトネリニモタセ侍リシヲタヒ給ケルサテ六ミヤクノ豹ノ皮トハ六フアミ

タルタウラコモノ事也ヤモチノサクラトハアカ米ノツカサル飯

ナリテシロノキノ子ト云ハヤツハノ根ノ白キセリナリ

太子三度

御手ヲノヘナテサセ給シカハタケニアマルヒスキノ御クシトナリヌ

ヤセヲトロヘ給ヘル御カホハセ忽ニ紅桃三千ノ花ノヨソヲヒト変シ

翠黛片月ノ妙ナルコヒヲソナヘ給ヘリ仍テセリヲツミ給シニ」五・オ

依テセリツミノ后トモ申又ハカシワテノ后トモ申奉ル

抑彼后ハタ、人ニ非ス彼カシワテノ里ニ貧賤狐獨ノ夫婦アリ古ハ都ニ住ケル者ナリシカ事ノ縁ニ引サレ此山

里ニヲチフレテ侍リケルアル時八月十五夜□〔乙〕クマナキニ

柴ノイヲリヨリ立出テ見レハ曇ナキ秋ノ月セイ〳〵トメ

千里ニ明ナリ　夫婦トモニナカメ心ヲスマシテ居タリケル時

円満タル明月二ニ破テ一ツハ我家チカキヲトハ山ニヲチ

カトリケル此者不思議ノ事ニ思テ次ノ朝タ彼ノ所ヲ見」五・ウ

侍ケルニ歳三歳ハカリナル姫忽然トメ樫ノ葉ヲ敷テ

座ス此ヲキナヲ見テ手ヲアケテキタカレントス其時

ヲキナイカナル変化ノ者ナリトモ是程ニナツカシケニ

思タル

事アワレニ思テ是ヲキタイテ家ニカヘル年月程ナク

セイ長シテ三年ト申ニハ十五六ノ女ノ形ナリ天情柔

和ニメ孝養ノ心深シ父母是ヲ憑事不レ浅門々戸々ニ

食ヲモトメ山野ニ菜ヲタシナンテ病ノ父母ヲハコクムト云々

太子臣下ニ曰ク我望忽ニ満足ス雖レ然今一ノ望アリ」六・オ

所謂ヨキ馬也諸国ニ令旨ヲ下テ求レ之ヲヘシトテ尋

ラレケレハ数一千疋引参タリ中ニモ甲斐ノ国司秦ノ

川勝カ進上シタル黒キ駒アリ太子是ヲ御覧メ比ヲ

召ヲカル此馬ハ信濃国井ノ上ヘノ牧ノ馬也此牧ニ黒キ

馬

アリ東国アサマノタケヨリ竜馬クタリテ此雑馬ニトツ

ク仍テ母モ黒毛ナリ此駒程ナク生長シテ天ヲカケ

ル応用アリアサマノタケヨリスルカノフシノス□〔ソ〕ヘ虚

空ヲ

カケリ昼夜ニ飛渡ル国民之ヲ国司ニ奏ス是ヲ聞テ」六・ウ

イカニシテカ之ヲ取テ君ニ奉ヘキト思テハカリ事ヲ

カマヘシカトモ取事不能国司思様ハ天下ニ生ヲ受ル物

誰

カ国王ノ命ヲ背ヤ然ニ今上儲君太子ノ令旨ヲ給テ
宣命ヲ竜馬ニ含ム爰ニ駒国司ノ前ニヒサヲオリテ
ヒレフス国司取レ之三長三短ニシテ穆王八駿ノ駒モカク
ヤト覚タリ此トネリニ成ヌヘキ者我朝ニ難レシ有トテ
百済ヨリ渡リシ調使ト云者ヲトネリニ付ラレタリ今一
人ハ
川内国ミヤキケノカチシ丸ヲ付ラル太子天皇ニ申給ク
」七・オ
此駒ハ三千年ニ一度ケン王ノ御代ニ出現ス然ハ三月三
夜
御暇ヲ給日本国中ヲ拝見仕ラント存候トアリシカハ
御門事ユヘナク御ユルシアリ調使ヲ御共トメ水ツキニ
ヨク
取付ヘシトテ御馬ニメサレフチヲウテ虚空ニアカリ東
ヲ
指シテトヒ給駿河ノ国富士ノ峯ニ御馬ノ足サワリシカ
ハ此
峯ニ下リ給テセンチヤウノアリサマヲ御覧スルニ八方
ニ峯
タカク八葉開敷ノ形ヲアラハシ中心ニ清浄ノ宝池アリ
池ノ
片原ニ休息有テ池ノ面ヲ御覧シケレハイケニ波ノ文ア
リ」七・ウ
金色ノ光明ヲ放ツ良アテ阿ミタノ三尊化現メ曰ク衆
生ヲ度センカ為ニ浅間ノ権現ト顕テ此山ノフモトニ地
獄ヲ
構ヘ受苦ノ衆生ヲ入シメ毎日三時ニ此地獄ヘ入テ罪業
ノ衆
生ヲ済度シ侍リ御覧セラルヘシトテ三尊ト太子ト此池
ニ
入テ半時斗ハ見給ハス調使丸ハ奇異ノ思ヲ成ケル太子
水ノ上ニ浮ヒ出サセ給テ又御馬ニメサレ東ヲサシテア
キ田ノ
城ニ打下ラセ給テ未来ノ衆生ノ為ニトテ高キミネニ大

ナル

盤石アリ此上ニ御馬ヲ打ヲロサセ給テ石ノ上ニタヽセ給竜馬」八・オ

ヒツメアトフカクシテ五寸ハカリフミ入テトヽメ給ヘリツホノ石

フミトテ今ニ侍リカ様ニ日本国中ヲ御巡礼アリ熊野三ノ

御山ナントマテ御参アテ権現ニ御内讃アリ伊勢太神宮ニモ御参アテ三日三夜ニハ大和国ノ宮ニソ還御ナラセ給ケリ

廿八才　廿九才　卅歳　此三ケ年ノ間ハ諸国ノ軍

兵ヲメシテ新羅　高麗　任那等ノ国ヲ打シタカヘ御調物ヲ日本国ヘソメサレケリ

三十二歳　国中ノ人民男女老少一千人御教導アテ」八・ウ

出家受戒セシメ給フ

三十三歳　夏四月ハシメテ十七ケ条ノ憲法ヲ製シテ天皇ニ奏シ王法ノ規模トシ政道ヲ懃ヒ律令格式此ヨリ則チ起レリ

三十四歳　甲斐ノ黒駒ニメサレテ今度ハ廿日ノ間ニ陸地ヲウチマワラセ給テ日本六十余州ニ国府寺ヲ建立シ神社仏寺ニ田ヲンヲ寄附セラル造像起塔等専此年成也

三十五歳　御門太子ヲ請メ勝鬘経ヲ御講讃アルヘキ」九・オ

ヨシ申サセ給シニ実ニ御本意ニ思食シカハヤカテヲワタノ

ミヤヲ庄厳シテケツカイ清浄ノ道場トメ御講讃アリ

玉ノ御冠赤衣ニ御袈裟ヲ着シ七宝ノ師子ノ床ニ

座給フ八十種好ノヨソヲヒヲ現シ給フ金輪聖王八玉ノスタレヲカヽケ竭仰ノタナ心ヲ合給フ后妃采女ハ花ノタモトヲ陣頭ニヒルカヘス堂上堂下同時ニ涙ヲヽサヘ

宮中

宮外ヒサヲマシヘテ聴聞ス梵唄虚空ニ引ケリ微妙和雅ノ音声也人々寄特ノ思ヲ成セリ勅使ヲ立ラレ」九・ウ

テ声ノヲサマラン処ヲキヽテ参ヘシトテ尋ラレシニ宮ヲ去ル

事東ニ十余町ヲヘタテヽ山ノフモトニ少池アリ此池ノ中

ヨリ声ヲ出スアヤシンテ池ノ面ヲ見ニ六月ノ事ナルニハスノ

ウキハニ少キ青色ノカエル此梵唄ヲソ引ケル此カエルハ

只者ニ非ス達摩大師也或ハ第三日ニ及テハ天ヨリ三尺ノ蓮花南庭ニフリアツサ三尺ナリ橘樹寺ノ講堂ノ

前ニ太子身ツカラ石ノ壇ヲツキ之ヲウツミ給ヘリ猶ノコル

蓮葉ハ宝蔵ニ之ヲ納ラル又結願ノ日ハ宮ノ門前ノ」十・オ

山ノイタヽキニ尺迦多宝ヲ初メテ千仏ノ烏瑟顕現

シテ勝鬘経ヲ証明シ金色ノ光明虚空ヲ照シ風栴

檀ノ匂ヲ送ル何ソ霊山ノ古ヲ求ニ中天竺ニ浄刹ノ

ヨソヲヒヲ尋ニ界外土ニ哉

三十六歳　太子天皇ニ奏シ給我過去六生ノ間震旦

江州衡山ニ修行セシ時長時ニ読誦奉シ小字ノ法花経

其外十八種ノ道具等ヲ我国ヘムカヘ渡サント思召ヨシ

奏シ給ケリ御使ニハ中モコノ大臣ヲ定ラル先彼国ヘ至ル」十・ウ

道ノ程ハ蒼波ヲ西ニヘタテヽ海路万里也サテ江州ノ津

ヨリ衡山ノ間二千八百三十里也彼峯ニ五ノ高峯アリ

紫蓋般若解脱恵日花蓋是也其中ニ我住セシ処

ハ般若ノ峯円通院ノ内般若臺ト云草庵也松木ニテ

作シ間松室ト名其室ニハ我先生ノ南岳大師ノ御影

ヲカケタリ其カタワラニ又一ノ草庵アリ是ヲハカツラ

ノ木ニテ

作シ。依テ佳室（ママ）ト名我彼所ニ化導一生ノ第子僧俗一万

五

千人アリキ遷化シテ我朝ニ誕生スル事今年三十七年也

」一一・オ

其間彼弟子等年々生々ニ逝去シテ今老僧三人ノコ
レリ此三人ノ老僧ハ我在生ノトキ懇ニ申ヲキ侍リ我東
海国ニ誕生メ彼国ニ仏法ヲ舛メ衆生ヲ利益スヘシ受
生以後卅七年ト云時此持経等ヲ取ニ遣ヘシ其マテ相
待我使者ニ渡侍ルヘシト約束セリ早々彼所ヘ行テ
上件ノ物共ヲ持来スヘシト委細ニ仰フクメラレシカハ
小
野大臣辞退ニ不及已ニ四月上旬ニ鎮西ハカタノ津ニ
下向ス彼三人ノ老僧ノ方ヘ法服三具トヽノヘ遣ハサル
漫々」一一・ウ
タル海上ニトモツナヲトヒテ望ヲ江州ノ津ニカケケン
〳〵タル
煙濤サヲサシテ思ヲ般若ノ峯ニ　七日七夜ニ
江州ノ津ニ着岸ス則江州ノ国王ニ此由ヲ奏聞ヲヘ
シニ国王ノ使ニ相副テ衡山ヘ送ラル小野大臣ハ上下
数十キニテ彼山ノフモトニキタリヌハル〳〵ノ山路松
栢

シン〳〵トシテ枝ヲツラネ苔石セキ〳〵トメ道ニ立般
若ノ
峯ソヒエ恵日ノ禅洞ヲホロ也円通院ニソ至リヌ事
ノ旨趣ヲノヘサルニ小沙弥出テ大臣ヲ見テ云我先師」
一二・オ
念禅法師ノ使来リト悦テ老比丘ニ告ク三人ノ僧ニ
和言通シ難キ間指ヲ以テキサコニカキノヘテ太子ノ御
書并ニ法服等ヲ渡奉ル時ニ三人ノ老比丘是ヲ見
則地ニタウレテカナシミテ云クアワレナル哉我大師遷
化
ノ後ネンコロニツケケキヤクシ御キワレ遷化ノ後ハ更
ニ東
海国ニ至テ彼国王ノ太子ト生テ衆生ヲ利益シ如来
ノ遺教ヲ起スヘシセンケ以後卅七年ヲ経テ使ヲツカワ
スヘシ
其時我持経八巻一軸ノ法花経其外道具等是ヲ」一二・ウ
送リ遣スヘシ其マテ汝千寿命ヲタモチテ相待ヘシ

ト此遺言タカフ事ナク送ヘシト仰ラレシカハ今年已ニ
卅
七年ニ相当レリカナシキ哉ヤ蜉蝣ノ命キエスシテ今
二タヒ本師後生ノ恩札ヲ拝奉ル事ヨトテ三人ノ老
比丘音ヲ立テ悲泣ス小野大臣モ此コトハリヲ聞キ
共ニ涙ニムセヒケル寺中ニ入テ般若タキニ至リ又旧
跡ヲ拝見スルニ新儀ヲ見奉ルカ如シ毎事示給シ□
少モタカウ事ナシ彼御持経道具等ハ石室ニ納メラレ」
一三・オ
ケルヲ取出遣唐使小野ノ大臣ニ員数ノ如クワタシヌ
院中ノ僧侶ナコリヲ、シミ一千余人一面ニ立テ香ヲ
タキ花ヲ散メ小野大臣ヲ拝シ奉ル殊ニ三人ノ老僧
名残ヲ、シミ門前マテ立出テ賤別ヲカナシミテ紅
涙ヲナカスナケヒテ云我等サカンノ歳ナラマシカハ君
ト
同帰舟ニウツリテ東土ニ渡ナン余命イクハクナラス然
間万里ノ波濤ヲヘタテ、ノソミヲ五カクノ旧室ニ止メ
タリ
悲哉ヤ哀ナルカナヤトナケキケルニ実ニアワレナル有
様也」一三・ウ
大臣已上寺門ヲ出テ江州ノ津ヘムカワレケル江州国王
ノ
玉ハクサシモ此国ニテ興法利生辱ク大権聖者ニテ
御キ又東土ノ利生大慈大悲ナツカシク侍ヘリトテ調使
十八人ヲトヽノヘテ小野大臣ト同船シテ日本国ノ皇
太子ヘ遣ハサレケリ同年八月上旬我朝ハカタノ津ニ
着ス大臣持来スル処ノ物共三人ノ老比丘ノ御返事ヲ
太子ニ捧ク御持経ノ法華経大聖如意輪像一鋪釈
迦一鋪肉色ノ釈尊ノ仏舎利七粒センタンノ月ハタノ」
一四・オ
脇息玖珀ノ念珠珊瑚ノ御ハチ建陁羅鼓ノ御袈
裟金玉ノ鬢尾犀角ノ白払子等悉ク是ヲ送進□
太子曰ク悦ノ中ニ一ノ憂アリ此法花経ハ我持経ニ非ス
我第子ノ僧ノ持経也イマタヒホヲトキテ拝見シ給ハサ

ル

ニ諸人ニツケテノ給ク此経ハ我第子睡眠比丘ト云シ僧ノ

持経ナリ其故ハ彼僧常ニ睡眠ニヲカサレテ火ノホトリニテ此経ヲ読誦セシ程ニトヒ火ニ経ノ二字ヲ焼ケリ四ノ巻五百品ノ長行ト偈頌トニ二所アリト仰ラレテ開」一四・ウ

御覧スルニ少シモタカワス長行偈頌ニ二字焼失ス左右ノ近習不思議ノ思ヲナス彼比丘ノ御返事云何ナル御深意ニヤヤカテ火ニ入給其後太子夢殿ニ入テ七日七夜ヲ経テ我真実ノ御持経ノ本ヲ取給フ此殿ノ近邊ニシテ音ヲタテス守護シ奉ルヘシトテ今法隆寺ノ川原ニ八角ノ円堂夢殿ニ入テ自戸ヒラヲトチ七日七夜入定シサテ七日ヲ経テ内ヨリ出給沈檀ニホヒ苟 光明天中ニカ、ヤケリ八巻一軸ノ御経忽然ト」一五・オ

シテマシマス

三十七歳　去年江州ノ国王ヨリ遣サレシ朝使十八人ヲ返サレケル小野大臣又同江州ヘ渡ケリ是ハ私ノ志也去年面渇トケシ三人ノ老比丘等ノ行ヘヲホツカナク

思テ今一度向顔ヲトケント云志ニヨテ同朝使ト彼ニ渡ル

程ナク衡山ニ至テ纔一人ニ遇ヒ侍リ比丘大臣ヲ見テ涙ヲ流シ愁歎シケリ干時大臣問曰ク抑去年面悦ノ今二人ハト問侍レハ答曰ク其事ニ侍リ去年」一五・ウ

皈国ノ後幾程ナク二人ノ僧逝去セリ我レ一人猶存セリ二度面拝ヲトクル事生前ノ悦ナリ唯シ一ノ不覚アリ是ニ侍リシ小沙弥アヤマテ御持経ヲ取チカヘ御弟子ノ経ヲワタシ奉リ侍然ルニ去年八月下旬ノ比太子青竜ノ車ニメサレ紫雲ニノリテ四大天王玉ノハタヲ指アケ天童白蓋ヲオ、キ虚空ヲ飛テ来侍リ石室ニ入テ彼御持経ヲ取テ還御ナラセ給キトツク時ニ大臣思

合ルニ七日夢殿ニメ入定シ給シ其時分ニ相当レリト」一六・オ

共ニ感歎シケリ大臣已ニ日本ヘ皈ラレシニ一人ノ老比丘

実ニナコリヲ、シミテ門前ニ立出テク、リケル大臣ノ袖ヲヒカヘテ云ク我今寿限ツキナントス命シナハ東海国ニムマレテ太子ノ御ヤツコトナルヘシト我名ハ念正比丘

ナリトテ門前ノ石ノ上ニ登リ坐具ヲノヘ香ヲタキ東ニ向ヒ端座合掌シテネムルカ如クシテ早ヌ太子此由聞召御ナミタニムセヒ給キ云々

三十八歳　カツラ野ノ御行此時也広隆寺」一六・ウ

伽藍ヲ立ラル

三十九歳　百済ヨリ伶人三十六人ヲ召ワタサレ秦ノ川勝舎弟時勝カ子孫ニ此舞ヲ習セラル　日本国ノ舞楽此ヨリ始ル

四十歳　推古天皇大和国兎田野ニ出サセ給テ御カリアリシ。太子天皇ニ奏シ給ハク殺生ハ是罪業ノ元娘生死ヲ引源也此御カリヲ止ラレ候ヘキヨシ申給シ□ヨリ。国王ノ御狩是ヨリト、メラル」一七・オ

四十二歳百済ヨリ渡シ巧匠等ヲ召具シテ河内ノ国礒長ノ里ヘ御行ナラセ給テ我御陵ヲツキコシラヘサセ給中五年ニ終ニ巧ラヲヘ給其陵ノアリ様ハ中ニハ四方ニ大盤石ヲキリ立テ内ハ平地ナルヘシミサ、キマワリヲ

ハ大路ニツクリテミサ、キヲ四方ノ山ニツ、クル事ナカレ葬

礼ノ時ノ大行道ノ為也又ハ太子ノ御苗孫ヲ彼代ニ相続スヘカラサル表示也ト云ヘリ太子大和国イカルカノ

宮ニ還御ナラセ給ケル時カタヲカノ山路ニテカキノ黒駒」一七・ウ

アラシヲフキ足ヲアカヒテ先ニス、ム事ナシ太子アヤシミ御覧スルニ道ノホトリニ。飢。饉。疲。瘦ノ乞人。平

臥(クワ)
セリソノカタチヲ見ニ面容(メンヨウ)長大ニシテ眼ニ異(イ)光
アリ沙門ノカタチタリ　太子是ヲ御覧シテ兎(ト)
角(カク)ノ御問答ニ及ハス一首ノ哥ヲ賜
シナテルヤ片岡山ノ飯ニウヘテフセルタヒヽトアワ
レヲヤナシ
ト仰ラレシカハ彼乞人御返事ニ云
ヰカルカヤトミノヲ川ノタエハコソ我ヲホキミノミ
ナハワスレメ」一八・オ
此御返事申テ後此乞人ヤカテムナシクナリヌ太子
御涙ニムセヒ御トネリヲ以メサレタリケル赤衣ヲヌキ
テ
彼死人ノ上ニヲヽウヘシトテカケラレテ還御ナリ給ケ
リ
次ノ日御使ヲツカワサレケルニ太子ノヌキヽセサセ給
シ御
赤衣ハカリアリテ死人ハナカリキ唯シクツノカタシ
ヲノコセリ御使是ヲ以テ太子ニタテマツル太子是ヲ
御覧スルニ悲泣シテ歎徳シ侍キ此乞人トハ達摩房也
太子衡山ニ修行シ御シ時西方ヨリ化来メ禅師ヲ勧メ」
一八・ウ
奉テ東土ノ衆生ヲ済度シ給ヘキヨシ御契約アリテ
達摩大師ハ太子誕生廿年以前ニ日本ニ来給シ太子誕生
ノ日ハアシケノ馬ト変メサヰシヨ誕生ヲ悦ヒ勝鬘講讃
ノ時ハ又蝦蟆(カハク)(カヘル)トナテ梵唄(ホンハイ)ノコヱヲアケテ称揚会場ヲ
助ケ給然ニ太子御誕生二歳中春ヨリ法ノ名字ヲ
唱ヘテ此土ノ衆生ニ聞法結縁セシメ大小権実ノ教
法四十二歳ノ中ニ盛(サカリ)也雖然達摩大師己身中ノ法
文教外別伝不立文字ノ器根未熟不能ニ此法ヲ興」一九・オ
只月ヲ指ユヒヲマホリテヰマタ拈花微咲(セウ)ノ口(クチ)ヒル
ヲシラス上々智観ノ機根ニウヘテ飢羸(ケルイ)疲癈(ヒセウ)ノ
カタチヲ示ス此時太子ノ御詠達摩(タルマ)ノ返事トモニ深
義ヲ述往因ヲ答給ヘリ口伝秘決ニ云々
四十八歳河内国シナカノ御廟(ヘウ)五ケ年ニ造功ヲハリ

シカハ其時太子御廟崛洞ニ入テ西方ノ立石ニ倚ヲ
シルシ御ス其願文ニ云
大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子」一九・ウ
是故方便従西方　誕生片州興正法
我身救世観世音　定恵契女大勢至
生育我身大悲母　西方教主旃陀尊
真如真実本一躰　一躰現三同一躰
片域化縁亦已尽　還皈西方我浄土
為度末世諸衆生　父母所生血肉身
遺留勝地此廟崛　三骨一廟三尊位
過去七仏法輪所　大乗相応功徳地」二〇・オ
一度参詣離悪趣　決定往生極楽界
如此石ノカヘニカキシルサシメ給テ還御ナラセ給ニケ
リ御
悲母ハ間人穴穂部ノ皇女御后ハセリツミノ后我御身三
所ミナ是ツキテノ如ク観音勢至弥陀ノ三尊ト申
事誰カ成レ疑ヲ哉　又天下ニ不思議ノ瑞相現ス一ノ天
変アテ東ヨリ西ヲサシテ虚空ヲ飛フ其形チ
刀ノ如クアカキ色ナリ動揺天ヲヒヽカシ虚空ヲカヽヤ
カス
時ニ百済ヨリ渡ル天文博士道吟ト云モノ太子ニ申様」
二〇・ウ
此変異　蚩由箕ト云天変也大国ニ昔シ聖人ホロヒン
ト
テ此瑞ヲ現ス太子今一両年ノ中ニハ此国ノ縁ツキ
給テ御子孫ハ五六ケ年ノ程ニ皆ウセサセ給ヘシト云
此年太子三十人ノ伶人ヲ以テ太子ノ宮ニメ御賀
ノ節会ヲ取リヲコナヒ給事三ケ月キセン上下御
ユルサレヲ蒙テ五キ七道宮ニ参太子ヲ拝シ奉レ
リ是モ生身ノ御形ヲ見ヘサセ給テ衆生ニ縁ヲ
結ハントノ御方便也」二一・オ
四十九歳此御年既ニ太子御入滅アリキ后妃
菜女ヲハシメ近習ノ大臣以下ナケキカナシミ給事
ナノメナラス然ニヤヽヒサシクアテ又蘇生シマシ〳〵

テ
曰ク我此世ヲ去事ステニカキリ也ト云ヘトモ后アマ
リニ悲泣シ給ツル御コエ耳ノ底ニ聞ヘテ臨終ノサハリ
トナリヌレハ又蘇生セリ今三ケ年ヲ経テ五十二ニ
□テ入滅スヘシアイカマヘテ誰モ臨終ノミキリニヲン
アキノ者ヲチカツクル事ナカレ末世ノ衆生コトニ臨終
ノ」二一・ウ
亡念忘習ヲトヽメスハ往生ノサワリナルヘシト云々
五十二歳二月廿二日ノ夜半太子セリツミノ后ト
アシカキノ宮ニシテ太子申サセ給様コヨヒハ后ト共ニ
入
滅スヘシ時分到来セリト仰ラレシカハ后申サセ給様
我最後ニトミノ井ノ水ヲメスヘシト申サセ給シニ太子
御哥
ケカレタル富ノ井ノ水ナニカセン八功徳池ニトクイ
タラハヤ
后御返事」二二・オ

ヨシサラハ五濁ノ水ハノマストモイソキテ行ム弥陁
ノ御国ヘ
サテ二月廿二日后ト同時ニ御入滅アリケレハ宮中ニ哀
動ノ声ヲアケ一天ニ悲泣ノ涙ヲナカシキ山河大地モ
カナシミノ声ヲナシ草木樹林モウレヘノ色ヲフクミ
ケリアシカキノ宮忽ニ双林ノ風ノ音ヲウツセリ
サテ五里ノ山路陵マテ人クヒスヲツキ満チミテリ
甲斐黒駒ヲハ調使丸之ヲヒキ御前ニ行黒駒御棺ヲ
カヘリミカナシミノ声ヲアケシキリニイハエケリ其時
黒駒」二二・ウ
モ種々ノ神変ヲ現メタヒノ遊ニシテヲワリヌ此馬
馬頭観音ナリト云々調使丸ハ出家シテ御廟ノ前ニ
七日念仏座禅メ二月廿九日ニツイニヲハリヌ
太子御入滅六年ニ大臣ノ子入鹿ノ大臣生得ト身ニ
キセイヲソナヘケリサウ人アテ云ク此仁只人ニ非ス国
ノ
位ヲウハウヘキ相アリト云ヘリ此語ヲ信シテ位ヲノソ

ミ

ケル太子ノ王子タチ国ニ御サハ王位ニソナハリ給ナハ
アシ
カリナン先彼王子達ヲウシナヰタテマツラント思テ」
二三・オ
太子ノ皇子十七人御孫八人。彼是廿五人ノ皇子ヲ宮ニ
入奉リテ焼コロサントシケリ一ノ御舎兄大兄皇子
ハカリ事ヲ以テ舊骨ヲ宮中ニチラシヲキテ廿五人
ノ皇子ヲ引クシテシノヒテ御出ナテ夜半ニヰコマ山ニ
ニケカクレサセ給ニケリヰルカノ大臣ハ宮ヲ焼キ後ニ
アトヲミレハ白骨ハヰノ中ニアリカクレテ山中ニ五ケ
日
マテ御テ又申サセ給ケルハ我等センソノ罪業ニ依テ
今此セメヲ蒙レリ是修因感果ノコトハリナレハナケク
」二二・ウ
ヘキニ非ス同ハ我等カ父ノ太子ノ御建立ノ法隆寺ニ
マイリテ彼所ニテ父ノ菩提ヲモトフラヰ奉リヰカニモ

成

ヘシトテ廿五人相共ニ法隆寺ヘ入セ給ヌ五重ノ宝塔
ニノホリ各々香炉ヲ取テ焼香シ西方ニ向テ唱テ
曰ク願ハ我父ノ太子上宮王託生シ御ス西方極楽世界ニ
往生セン三世ノ諸仏護念ヲ加テ来迎シ給ヘシト礼拝シ
給ケリ香ノケフリ紫雲ト成リ忽ニ廿五ノ菩薩ト
成テ西方ヲ指テ飛給フ」二四・オ
（白紙）」二四・ウ
舎利礼
一心頂礼　万徳円満　釈迦如来　心身舎利
本地法身　法界塔婆　我等礼敬　以我現身
入我我入　仏加持故　我証菩提　為仏神力
利益衆生　発菩提心　修菩薩行　同入円寂
平等大智　今将頂礼」二五・オ